

アクティブ・ラーニングを意識した授業展開

— 「初等中等教科教育実践Ⅱ」の授業における取組 —

喜多容子*

(キーワード：アクティブ・ラーニング、模擬授業、フィードバック)

I. はじめに

平成28年12月21日、中央教育審議会が「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」答申を示した。学校と社会が連携・協働しながら、子どもたちに新しい時代に求められる資質・能力を育成することを目指すこととなった。ここで、各学校における教育課程をコアに据えた学校教育の改善・充実を目指し、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を含む6つの枠組みの改善が提案された。

上記のことを踏まえ、平成29年3月31日には、移行措置期間として外国語活動を小学校中学年において実施することを明記した小学校学習指導要領、さらに中学校学習指導要領等が公示された(文部科学省, 2018a)。その中であって特に目を引くのが、「生きる力」の具現化と「アクティブ・ラーニング」の視点にたった授業改善である。「生きる力」の具現化は、新学習指導要領においては、社会の急速な変化に主体的にかかわり、どのように社会や人生をよりよいものにしていくかという目的を踏まえ明示されている。教育課程全体を通して育成する3つの柱として、ア. 生きて働く「知識・理解」の習得、イ. 未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成、ウ. 学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養を提言している(文部科学省, 2018a)。

また、「アクティブ・ラーニング」に関しては、子どもたちがこれからの時代に対応できる資質・能力を身につけ生涯学び続けることができるように、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進する視点で提言されている。

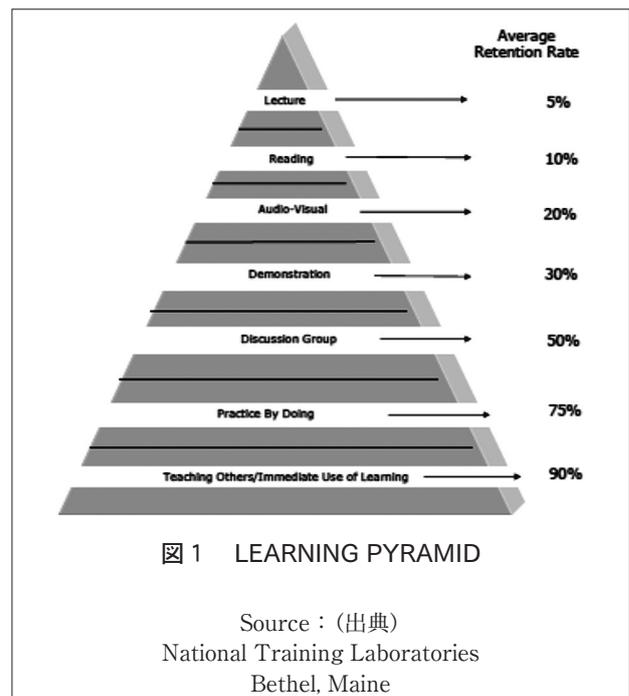
II. アクティブ・ラーニングについて

1. 「アクティブ・ラーニング」の土台となる諸理論

Dale (1969) は、学習の定着度に関するリサーチを行

い、2週間後にも記憶に留まる学習活動を「経験の円錐」として紹介している。Daleによると、教師主導型の説明が中心となり学習者が受動的に学ぶ授業においては、学習定着度が30%以下に留まるとされている。一方、定着度が50%を超える学習形態とは、自身の体験・協働学習など子どもたちが主体となり取り組んだものであると報告されている。このDaleの考えが、アメリカのNational Training Laboratoriesの研究によって導き出された、学習定着率を表す「ラーニング・ピラミッド LEARNING PYRAMID」(図1)として転用され、その後「アクティブ・ラーニング」につながる資料となったと、中嶋(2017)は考えている。

さらに、中嶋ほか(2017)は、「アクティブ・ラーニング」の土台となる興味深い7つの学説を紹介している。それは、①アメリカの教育学者ジョン・デューイの「問題解決学習法」、②旧ソ連の心理学者レフ・ウィゴツキーの「発達の最近節領域」「足場かけ」、③アメリカの心理



*鳴門教育大学 高度学校教育実践専攻(教科系)

学者ジェローム・S. ブルーナーの「発達学習」、④カナダの心理学者アルバート・バンチュラーの「自己効力感」、⑤アメリカの心理学者アブラハム・マズローの「欲求5段階説」、⑥アメリカの心理学者デビッド・オズベルの「有意味受容学習」、⑦フィンランドの社会心理学者ユーリア・エンゲストロームの「拡張的学習」である。これらの学説の中で筆者が注目したのは、アメリカ教育学者ジョン・デューイの「問題解決学習法」である。デューイの唱える「問題解決学習」は、Project-Based Learningであり、学生にとって能動的な学習となると筆者は考える。特に「問題解決学習」は、筆者の教職経験を踏まえると、初等・中等学校教育においては、盛んに実施されている学習法であると認識する。

2. 「アクティブ・ラーニング」の考え

長く日本の教育現場において、知識偏重型の授業が実施されてきたことは問題視されていた。知識を覚えることにのみ重点が置かれ、それをどのように活用するかという面が軽視されてきたのではないかと懸念を抱く教育者は少なくないと推察する。中嶋ほか(2017)は、「アクティブ・ラーニング」が日本で端を発したのは、平成24年8月に示された答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」によるものであると明言している。日本の大学では、教員が一方的に語る講義が中心で、学生は漫然と聞き板書をノートに書き写すだけの受動的な授業が展開されてきたことに対する反省点を踏まえた改革とも思われる。

ここで筆者が経験したアメリカの大学院での講義様式と日本の大学のそれを比較する。アメリカの大学では、授業参加度が重視され、学生は講義の中で必ずそれぞれが意見を述べることを求められた。教師が投げかけた質問に対し、学生が意見を述べ、それに対し他の学生がさらに意見交換を行い、内容が深まっていく。講義内容に必要な基礎的な知識・情報は、あらかじめ課題として各自が教科書や文献に目を通しておき、講義中は、学生が活発に意見を述べあったり、プレゼンテーションをしたりすることに重点が置かれていた。教師は、学生たちの意見や発表を聞きながら、適宜、質問を投げかけたり、授業の流れをつかませたり、また、効果的なフィードバックを行うファシリテーター的な役割も兼ねていた。課題は、講義内容に直結しており、講義に参加し意見を述べていなければ対応しづらい内容となっていた。学生を、自ずと能動的な学習へと導く講義形式・内容であったと思われる。

ここで、筆者は、菅・松下の大学での学生を対象とした「アクティブ・ラーニング」について、次の特徴に注目した(菅正隆・松下信之, 2017, p.10)。

学生は、受動的に教員からの話を一方的に聞くのではなく(教員は一方的に学生に講義するのではなく)、様々な活動(例えば、読む、話す、書く)に積極的に参加させながら、単に知識や情報の伝達から、より高度な能力や技能の習得をめざすとともに、より高度な態度の成長をもめざす。また、授業では、学生に興味関心をもたせ、教員側からのフィードバックを受けながら、より高度な思考状態(分析、統合、評価等)にもっていく。

つまり、これは、「アクティブ・ラーニング」を、知識・技能の習得とともに、実際にそれらの知識・技能を活用しながら、そこから見えてきた課題について主体的に探究する学習であると示唆するものである。

また、高木(2015)は、「アクティブ・ラーニング」を他者と協働しながら深く考える活動であると考え、豊かなコミュニケーションを媒介とした協働的な学習であると述べている。課題の発見や解決の過程で、主体的・協働的に学ぶことにより、深い学びへとつながると考えられる。

3. 大学での「アクティブ・ラーニング」の実態

2014年に文部科学省は、「大学における教育内容等の改革状況についての調査」を行い、全国454大学から、「学部段階において、能動的学習(アクティブ・ラーニング)を効果的にカリキュラムに組み込むための検討を行っている」との回答を得ている。2016年には、学部段階でアクティブ・ラーニングを取り入れた授業科目の増加を図ると回答した大学が、全国492校に上る(文部科学省, 2018b)。「アクティブ・ラーニング」の重要性についての認識が深まった結果と言える。しかし、湯治ほか(2018)は、学生の学修成果の把握を実施している大学が44%程度にとどまっていることを懸念し、学生を主体にした学修成果の指標の必要性を説いている。

III. 本稿の目的について

本稿は、下記の文部科学省の「アクティブ・ラーニング」の定義に基づき、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点から「初等中等教科教育実践Ⅱ」における授業実践を行い、授業改善に向けた方策を検討することを目的とする。

文部科学省(2012)は、「アクティブ・ラーニング」について、次のように記している。

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することに

よって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

IV. 実践方法と内容

1. 「初等中等教科教育実践Ⅱ」の概要

授業の目的及び趣旨：初等中等教科教育実践Ⅱは、教育実践コア科目であり、学校教育における英語科授業を展開するために必要な基礎的・基本的な理論と実践の技術・方法に関する理解を深めることを目的とする。授業の到達目標：英語教科書に示された言語材料や内容を多角的に検討すると同時に、英語学習や英語指導を観察することを通して、英語授業の現実に触れ、実践的な英語指導を分析する力を養う。

学修課題：

- ・母語と第二言語の習得の差異について考える。
- ・小・中の学習指導要領や教科書等を精査し、小・中連携について考え、問題点を指摘し解決法を探る。
- ・第二言語習得理論を教育の実践に結びつけ、実際に授業を組み立て、マイクロティーチングを行う。
- ・中学校での英語教育の実践について知る。

授業計画：

1. オリエンテーション
- 2～4. 言語能力とは？第二言語習得理論・第二言語習得理論と教育
5. 小・中連携(1)その実態と問題点
6. 小・中連携(2)中学校での指導の留意点
7. 中学校英語教育(1)第二言語習得理論と授業の実際
8. 中学校英語教育(2)教材教具及び授業導入部の効果的な指導法
- 9～12. マイクロティーチング(1)(2)(3)(4)
- 13～14. 中学校の英語教育の現状(1)(2)
15. 振り返りとまとめ

2. 対象となる学生の概要

対象は、本校学部2年生英語科教育コース学生7名及び中学校英語教員2種免許取得を目指す特別支援教育専修学生3名を含めた10名と、4年生1名の合計11名である。英語科教育コース学生7名は、1年次に初等中等教科教育実践Ⅰにおいて、初等教育における外国語学習についての認識を深めている。

3. 実施内容

本稿では、初等中等教科教育実践Ⅱの概要で述べた授

業計画の第5回から12回の実践についてその詳細を報告する。この講義では、主として中学校で英語科授業を展開するために必要な基礎的・基本的な理論と実践の技術・方法に関する理解を深めることを目的としているため、その過程で協働学習を軸とした発見学習、問題解決学習、体験学習を教室内でのグループ・ディスカッション、グループ・ワーク、模擬授業等にて行った。また、学生の「学習への気づき、振り返り」を教師が把握し、効果的なフィードバックを行うため、講義後は、formsを通して「学びの振り返り」を提出してもらい、その内容を分析した。Formsには、マイクロティーチングや授業の組み立てを行う際に疑問に感じたことや困ったことに関する質問を記入する欄も設け、マイクロティーチングのフィードバック後に、全体で解決例について共有した(表3)。

ただ、中等教科教育に関する基礎的・基本的な理論の習得も必須であるため、InputとOutputのバランスのとれた講義内容となるように努めた。

(1) 基礎的・基本的な理論の習得、Inputの過程におけるアクティブ・ラーニングへの試み

【個人→協働学習(ペア・グループワーク)→全体で共有→教師のフィードバック】

第5回 講義 小・中連携(1)その実態と問題点

・ここでは、理論の習得が主な活動であるが、常に「学び合い」を意識した授業展開になるように心がけた。基礎的・基本的な理論の習得においては、小・中の学習指導要領や教科書等を精査し、小中連携についてその実態を知り問題点について考える機会を設けた。改定の基本方針や改定のポイントについて共通理解を図った後、素早く協働学習へと移行した。小中連携に関しては、平成29年告示「小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編」と「中学校学習指導要領解説外国語編」の小・中の学習指導要領の目標・内容等の参照をペアで行い、全体で発表することで共有した。その後、教員は、学生が共有した内容を視覚的に捉えやすい内容にまとめたものをパワーポイント等で提示することにより、基礎的・基本的な理論の習得への手助けを行った。Inputの手助けとなるICT教材の効果的な活用にも工夫を加えることが重要である。

また、外国語学習における小中連携に関し、学習指導要領解説編に記載された内容や具体的な事例を取り上げ、どのような問題点があり、どのような解決策が考えられるかについて考える時間を設けた。ここでは、まず個人レベルで考えさせ、その後、協働学習へと移行した。

(2) 基礎的・基本的な理論の習得と実践への移行, Input から Output へとつなぐ過程におけるアクティブ・ラーニングへの試み

【全体で共通理解→体験学習（ペアワーク）→フィードバック】

第6回 小・中連携(2)中学校での指導の留意点

- ・中学校英語科における単元別指導案作成の方法や4技能統合型の指導方法, 言語活動の充実を目指した授業内容について知り, 場面指導のビデオクリップを視聴した後, ペアで small talk や多様な reading aloud を体験する機会を設けた。



図2 ペアワークの様子

【全体で共通理解→協働学習（ペアワーク・グループ・ディスカッション）→フィードバック】

第7回 中学校英語教育(1)第二言語習得理論と授業の実際

- ・授業の組み立てについて確認した後, 「英語教育AR」を活用した実際の英語科学習の授業を観察し, ペアやグループで意見交換を行った。浮かび上がってきた疑問点等については, 学生の発言に他の学生が応答的に反応し, さらにその後, 教員も解決の手がかりとなるヒントとなる事例について示すことにより, 全体が考えを深めていくように努めた。

第8回 中学校英語教育(2)教材教具及び授業

導入部の効果的な指導法と指導案作成

- ・中学校英語科で活用するワークシート作成時の留意点やデジタル教科書をはじめとするICT教材の有効利用の在り方, そして oral introduction など, 授業導入時における様々な事例などを体験しながら, 自分たちのアイデアも交換する時間を設けた。

次週からのマイクロティーティングに向けて, 英語科学習指導案の作成も行い, 作成時の疑問点等に対応した。学生が作成した学習指導案に関する相談には, 授業時間外のオフィスアワーに個別に対応し, 不安や悩みを取り除き, 自身を持ってマイクロティーティングに臨むことができるように支援した。マイクロティーティング(表1)については, オリ

表1 「マイクロティーティング」の概要

◎マイクロティーティングについて◎		初等中等教科教育実践Ⅱ
■	マイクロティーティングについて 教育現場で用いられる, 現実の授業を模した形で行われる20分ぐらいの短時間の模擬授業のことです。	
■	実施の日程(予定) 略 ◎都合が悪い場合は, 個人交渉で日程変更した後, 必ず喜多までご連絡ください。	
■	マイクロティーティングの実施方法 New Horizon 1~3年のテキストから1ユニット(単元)を選び約20分を指導します。 指導は一人で行ってください。(チームティーティングの形で友達にT2としてALTの役割をしてもらうのは構いませんが, 評価するのはT1で実施した授業のみとなります。必ず主として行うT1の授業を1回実施してください)。それぞれのマイクロティーティング終了後に, 発表者が質問やコメントを10分間受けます。	
■	マイクロティーティングの準備のために(改訂版学習指導要領などへアクセスできます)	
①	NEW HORIZON 年間指導計画作成資料など https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/chu/eigo/index.htm	
②	学習指導要領改訂のポイント http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afiedfile/2017/06/16/1384662_2.pdf	
③	新学習指導要領 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2017/06/21/1384661_5.pdf	
④	NEW HORIZON 単語移行資料 https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/chu/eigo/word_change/index.htm	
⑤	中学校学習指導要領解説外国語編 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2017/07/25/1387018_10_1.pdf	
■	マイクロティーティング指導案の作成 ・1ユニット(単元)の指導案を形式にそって作成してください。ワークシートを作成してもOK。 (実際にマイクロティーティングで指導するのはその内の20分のみです。)板書計画も別紙に書いてください。 ・模擬授業の最初に, 20分のマイクロティーティングの概要を簡単に説明してください。 ・指導案(およびワークシート)は, 約13名分(教師分も含む)印刷して, 当日配布して下さい。 ・マイクロティーティング実施に当たっては, パワーポイントも使用可です。 ・CDプレイヤーを使用する場合は, 授業が始まるまでに余裕をもって英語コースで借りて下さい。 ・指導案は早めに作成にとりかかり, 前日までには印刷して準備して下さい。(ギリギリにならないように)	
◎	質問等があれば, 早めに喜多(A313) ykita@naruto-u.ac.jp にお問い合わせ下さい。	

エンターションにて学生に説明を行ったが、第8回では、その趣旨・実施内容・指導案作成のポイント・当日の準備等について再確認し共通理解を図った。

(3) 教育の実践へつなぐ模擬授業、Outputの過程におけるアクティブ・ラーニングへの試み

第9回～12回 マイクロティーチング(1)(2)(3)(4)

学生は、これまでに習得した理論を実践の場に生かすため、模擬授業を実施した。質疑応答の時間を含めて25分程度のマイクロティーチングを実施した。発表前には、次の点を全体で共有するように伝えた。①単元における本時の指導のねらい、②20分で実際にするのは、指導案のどの部分であるか、③模擬授業内で配布するワークシート、④授業全体の流れが分かるようにミニホワイトボードに活動内容を箇条書きにして掲示すること、の4点である。特に④の活動の流れを可視化することは、特別支援の視点から重要性が指摘されていることである。学生は、それぞれが作成した学習指導案に基づき、板書計画と細案に沿って授業を進めていった。



図3 マイクロティーチングの様子

20分の模擬授業後には、他の学生からの質問に対応し、コメントやアドバイスに耳を傾ける時間を設けた。教員は、授業改善点と今後の授業実践に生かせるアドバイスを全体に伝え、効果的なフィードバックを行うように努めた。教師をめざす学生たちにとって、よりよい授業を追求する姿勢を養うことが大切であると考えたことによるものである。

V. 結果

講義後に毎回学生から提出された「学びの振り返り」の記述内容から、「アクティブ・ラーニング」を意識した授業展開について考察を行った。表2は、前半4回の学生の振り返りの記述(抜粋)である。前半は、基礎的・基本的な理論の習得が主な内容であるが、常に「学び合

い」を意識した授業展開になるように心がけたことが、学生にとって様々な気づきをうながす対話的な学びへとつながったと思われる。

表2 学生の振り返り(リフレクションシート)

<p>第5回 学生Mのリフレクション 今回の授業で英語科の学習指導要領を参照しました。2人で一緒に指導要領の比較をしたので、自分が気づけなかったことなどを、パートナーが教えてくれました。中学校での英語教育をするにあたって小学校での英語教育がどのように行われているか把握しておくことが重要であることを学ぶことができました。それにおいて、小学校の指導要領の内容と中学校の指導要領の内容どちらも知っておく必要があることに気づきました。中学校の教師になるから、中学校だけの指導要領を熟知していなければならないと思いました。</p> <p>第6回 学生Hのリフレクション ・(略) 各段階でどのようなことに注意をして教えるべきか考えることができたように思いました。また全段階で共通している点も多く見られ、基礎となる学力がいかに大切分かりました。小中学校の連携についてペアやグループで話し合いましたが、中学校から高校へのステップアップするためにどう教育すべきかといったことも新たに考えられました。また小学校から中学校、中学校から高校と区切るのではなく全体を通して考えることも必要なのだと気づきました。私が教師になる際には、今回の授業で、感じたことや気づいたことを大切にしたいと思いました。帯活動について(略)与えられてばかりでは、覚えたり、体得できたりすることは難しく自分自身が自発的に行っていくことで英語表現が身につくと感じました。(中略)仲間との協働学習の重要性についても考えました。(中略)授業内で行うのが難しいスピーキングのやり取りや発表の評価は、録画して、後で評価したり、後日のテストでライティングを評価したりすることは新しい情報でした。インタビューテストの様子のビデオをみて、実際にALTを1対1で話すテストは実践的だと思いました。</p> <p>第7回 学生Aのリフレクション 言語活動はお互いの気持ちを伝えあったり、自分の気持ちを言葉にしたりすることが大切であることが分かった。また、そのなかで、「相手意識」と「場面設定」を意識できるような活動にすることが重要だと分かった。伝える目的・場面・状況がないと気持ちが入らないため、堅苦しい表現ばかりになり、コミュニケーションを図るときにワンパターンで気持ちが伝わらないのだろうと思った。確かに、日本語でも目的・場面・状況で同じ意味の内容を伝えようとしても表現は異なると思った。母語が日本語である日本人が、今まで使ってこなかった言語である英語を学び、今までならできにくかった英語話者とのコミュニケーションができるようになることは、視野を広げるきっかけになるなと感じた。次に、授業の導入で行う帯活動やsmall talkを実際にやってみた。与えられてばかりでは、覚えられたり、体得できたりすることは難しく自分自身が自発的に行っていくことで英語表現が身につくことが分かった。また、仲間との協働体験の重要性についても考えることができた。ペアやグループで考えたり、話し合いをしたりすると一人で考えるよりいろいろなアイデアが生まれると感じた。</p>
--

表3は、後半4回の振り返りの記述(抜粋)である。模擬授業を行った学生は、内省と他の学生や教員との意見交換から、次回への改善点を見出すことができたことが「学びの振り返り」の記述内容から伺えた。また、模擬授業を参観した学生にも、それぞれ、授業構成をはじめとする様々なことに対する気づきが見られ、それらを内在化することが分かった。

表3 マイクロティーティング実施後の振り返り（リフレクションシート）

授業者のリフレクション

- ・今回の模擬授業で一番感じたのは、自分の準備や練習不足です。頭の中でイメージしたり、流れを確認しながら言うことを書き出してみたりはしたのですが、実際に黒板に書いてみることや授業の細案までは考えることができていませんでした。やはり、何度か教室で、自分自身で授業を一通りやってみることが必要であると感じました。そうすることで、どこでつまるのかなど足りないところが見えてくると思いました。また、ワークシートや板書なども自分で取り組んでみることでやりにくいところも見つけることができ、改善していけると思いました。
- ・授業で動画を見たときにとてもテンポよく進めていたのでこんな授業ができたらいいなと思い、意識しましたが、実際にやってみると、私自身は、生徒が理解しやすいスピード、生徒の理解度、様子などに目を向けられていなかったように思いました。練習が必要だと痛感しました。
- ・初めての模擬授業で指導案の作り方や授業構成をどうするかなど分からないことだらけでした。いざ自分が授業をすることとなると大変でした。初めての指導案作成に戸惑って試行錯誤の連続でしたから、ワークシートや板書計画を綿密に作成できず、計画的に準備をすることができませんでした。また、先生から前日に指導をして頂いたのに教壇に立つと頭が真っ白になって、思う通りにあまりできませんでした。初めてのマイクロティーティングは失敗だらけでしたが、とてもいい経験になりました。今回の反省を次へといかにして教育実習までには改善できるようにしたいと思います。

参加者のリフレクション

- ・3人の授業はそれぞれ違ったが、パワーポイントや板書計画というのはとても大事だと感じた。また中1の範囲は小学校でしていることが多く、どのように繋げるかがポイントだと思った。そのためには小学校で内容をしっかり把握しとかなければと感じた。文字に表すことは今の小学生ではあまりしていない事なので、どのようにわかりやすく表現するか考えることが必要だと思った。印象に残ったことは、実際に生徒に質問された時にどう答える？ということだ。自分は理解出来ているが、それを分かりやすく学年に応じて伝えないといけないのでより深い知識と工夫がいることを実感した。
- ・今回の3人の授業はそれぞれ個性が出て、興味をもてる授業だった。その中で、準備の必要性を感じた。特にパワーポイントや板書計画はあらかじめよく準備しておかないとスムーズにいかないと感じた。小学校で、中1の内容の基礎を音声中心でしていることを踏まえて、中学校でどのように取り扱うかを考えなくてはいけないと気づいた。
- ・実際にマイクロティーティングに参加すると、やはり日頃使い慣れていない英語をとっさに口に出すのが難しいことを実感し、日本人であるゆえに、つい日本語を使ってしまいそうだと不安に感じました。だからこそ英語の授業を行うにはしっかりと準備をしておくこと、日頃から教室英語に慣れておくことが大切だと思いました。また、小学校での外国語学習でも、近年、授業の内容の向上が求められているため、英語の発音についても今のうちにしっかり学習しておく必要があることを痛感しました。今回のマイクロティーティングでの評価、改善点をもとに、しっかりと準備して自分の中でベストな状態で、次の模擬授業に取り組みたいと思います。
- ・Gさんの授業ではゆっくりとしたスピードでとても聞き取りやすかったです。例も提示されていてわかりやすいと感じる授業でした。クラスルームイングリッシュも沢山使われていてとてもいい授業だったと思います。Yさんの授業では黒板の字もとても綺麗で声もハキハキとしていてテンポも良く実際に学校で行われていそうな授業だなと思いました。Yさんは、授業中も机間巡視をして生徒の一人一人に目を向けているように思いました。
- ・Gさんの板書の工夫にあった、活動の流れを黒板に書いて見える形にしていたので、とてもいいと思いました。オールイングリッシュで授業を展開していましたが、子どもにも理解できるようなクラスルームイングリッシュを使ったり、分かりやすく例を見せたりして工夫しているのがとてもいいと思い、参考になりました。
- ・Yくんのマイクロティーティングを見て、授業構成がしっかりしていて授業の展開の仕方がとても良かったです。さらに新出単語をただ読むのではなく例文も練習していて、インプットがしやすくいいなと思いました。細案を用意していて、クラスルームイングリッシュの活用や話題展開の仕方もしやすいように工夫していてとても参考になりました。

Formsに寄せられた質問事項

Q：授業をしていると時間が足りなくなってしまう。時間通りに授業を進めるコツはありますか？

A：細案を立て、授業の流れをつかむことをお勧めします。また、板書計画もしっかりとたてると全体像が見えます。なおかつ、自分でシミュレーションをしてみることです。そうすると、実際にどのようなクラスルームイングリッシュが必要か、この活動にはこれぐらいの時間が必要であるということの予測がつかます。細案の中に、必ずタイムテーブルを入れ込むことをお勧めします。

学生の反応

- ・模擬授業をする上ではやはり万全の準備をすることの大切さを感じました。実際に模擬授業をしてみる、黒板を使ってみる、そうしたら具体的に必要な教室英語がわかる、時間がわかるという話しになるほどと思いました。

模擬授業では、初めての中学校外国語科の授業実践に向け、試行錯誤を重ねながら授業の組み立てを行い、クラスで発表し、さらに、他の学生や教員からのフィードバックを受ける等、これらのすべての過程が、「主体的で対話的な深い学び」へとつながったと思われる。

VI. まとめ

基礎的・基本的な理論の習得が主なねらいとなる授業においても、InputとOutputのバランスの取れた、常に

「学び合い」を意識した授業展開になるように心掛ければ、「アクティブ・ラーニング」へとつながることが示唆された。また、実際に授業の構想を練り、組み立てを考え実践することは、教師をめざす学生たちにとって、大変有意義な体験学習であると確信した。マイクロティーティングの実施に向けて、指導案作成から授業の組み立てや授業の展開について試行錯誤を重ねる過程こそが、学生にとっては「主体的な学び」につながると期待される。模擬授業（マイクロティーティング）後に、他の学生からの授業内容や指導案に関する質問に対応すること

は「対話的な学び」へとつながると考える。さらに、様々な意見やアドバイスを自分なりに受け止め、次にどのように生かせるかと思案することが「深い学び」へとつながると確信する。

引用文献

Dale, E. Audio-Visual Methods in Teaching (3rd ed.), New York: Holt, Rinehart & Winston. p39~40. 1969.

http://ocw.metu.edu.tr/file.php/118/dale_audio-visual_20methods_20in_20teaching_1_.pdf

(アクセス確認 2019. 1. 21)

菅正隆『アクティブ・ラーニングを位置づけた小学校英語の授業プラン』明治図書. p9. 2017.

菅正隆・松下信之『アクティブ・ラーニングを位置づけた高校英語の授業プラン』明治図書. p.10～17. 2017.

文部科学省「用語集」p4. 2012.

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2012/10/04/1325048_3.pdf

(アクセス確認 2019. 1. 24)

文部科学省『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説外国語編』開隆堂出版. p.3～9. 2018a.

文部科学省高等教育局大学振興課大学改善推進室「平成 27 年度の大学における教育内容等の改革状況について（概要）」p.11～13. 2018b.

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afiedfile/2017/12/13/1398426_1.pdf

(アクセス確認 2019. 1. 25.)

中嶋洋一・直山木綿子・久保野雅史『プロ教師に学ぶ真のアクティブ・ラーニング』開隆堂出版. p20, 21, 25. 2017.

高木展郎「教える授業から考えさせる授業へ」教育委員会版. Vol.3. p.1～2. 2015.

https://berd.benesse.jp/up_images/magazine/VIEW21_board_2015_11-tokushu_1.pdf

(アクセス確認 2019. 1. 21)

湯治宏樹・阪根健二『「教職論」における授業形態と学生の授業参加度との関係』鳴門教育大学授業実践研究. p3. 2018.

参考文献

文部科学省「アクティブ・ラーニング失敗事例ハンドブック」2014.

https://www.nucba.ac.jp/archives/151/201507/ALship_paiJireiHandBook.pdf

(アクセス確認 2019. 1. 23)

文部科学省「未来を見据えた初等中等教育改革」p.3～

5. 2015.

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/059/siryo/_icsFiles/afiedfile/2016/02/16/1366476_3.pdf (アクセス確認 2019. 1. 23)

文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説外国語活動・外国語編』開隆堂出版. p 2～5. 2018.

